

# 未来への の 伝承

第195回

## 明治初年の藩政改革意見書

明治2(1869)年3月、土浦藩主土屋<sup>しげなま</sup> 挙直(1852~192)は、天皇へ土地と人民の返還を願ひ出ます(版籍奉還)。同6月、この願ひは聞き届けられ、挙直は新たに知藩事(藩知事)に任命されました。以後、同4年7月の廢藩置県まで、土浦藩は明治政府の行政組織として、集権化を進める政府のもとで兵制や禄制、職制など多方面にわたる改革に着手しました。

この時期に記された土浦藩の職制改革に関する意見書が残っています。意見書を提出した人物は、土浦藩士の小林<sup>わたる</sup> 渉(1824~1916)です。渉は、江戸時代には藩政や藩士を監視する目付などの役職を務めました。明治維新後は、新治県や司法省に出仕したほか、茨城県会議員や土浦町戸長などを務めました。意見書を提出した時は土浦藩の少参事という職にあり、藩政の中枢に位置していました。

渉は、意見書の中で、職制改革布告後の評議の停滞を指摘します。そして、役人たちをやる気にさせて評議の進展を促すため、挙直による役人への政務の委任、「議事所」の設置による上申の場の開設、大参事以下による速やかな政務処理、能力主義に基づく人事、監察を通じた役人の勤務態度の把握などを提言しています。

それでは、渉の意見は実際に改革に反映されたのでしょうか。意見書の提出から約半年後の明治3年5月時点の藩の職制には、「議事局」と「監察曹」という部局が置かれています。残念ながら、これらの部局が渉の意見を反映して設置されたことを裏付ける資料は確認できません。しかし、彼の主張が結果として一部実現していたことは確かといえます。

今回紹介した意見書は、明治初年における土浦藩の藩政改革が必ずしも順調ではなかったことを物語っています。一方で、役人の中にはそうした状況に危機感を抱き、積極的な改革案の提言を行う人物もいたことが明らかとなりました。困難を伴う改革を推し進めた背景や原動力を、彼らの声に求めることは重要です。

渉の意見書は、5月6日(水)まで市立博物館で開催中の企画展「土浦藩士の江戸・明治」にて展示しています。ぜひご覧ください。

市立博物館 ☎029・824・2928



最後の土浦藩主  
土屋 挙直  
(市立博物館所蔵)

差し迫った状況にあるので、恐れ多いですがあえて忌憚のない意見を申し上げます。

改革の停滞を心配している者もいると聞きます。



▲小林渉藩政改革意見書(個人所蔵)